
伝えない電話

希菜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

伝えない電話

【Nコード】

N1668I

【作者名】

希菜

【あらすじ】

あなたが幸せにしたい人は誰ですか？

三題話伍「携帯電話」「ぬいぐるみ」「幸せ」

「俺は・・・、奈菜がすきだ。」

携帯電話の向こうで、心を決めた、青年の声がした。

自室のベットの上、私のすぐ近くに腰掛けていた少女は、目を泳がせて息をするのも忘れていた。

しばしの沈黙。

ツー ツー ツー

携帯電話をおいた。

少女はまぬけのように口を開けたままそつと立ち上がり、部屋の窓を開けた。

あけたとたん夏に夏の冷たい夜風が吹き込む。

車の音がうるさかった。

世の中は好き勝手にやっていた。

しばらくしてから、少女は携帯電話を右の手に取る。

たったまま、窓際にいった。

一瞬少女と目が合う。

心を決めた、顔をしていた。

再び電話をかけているようだ。

、

相手が出たようだが、外が騒がしくてここからは聞こえない。

「・・・もお、ばかあ。」

窓にもたれかかってこちらを向く。

少女は鼻から、耳まで赤くして唇に力を入れながら声をふりしぼったようだ。

「気づいてたよそんなのつくにいい。別にびっくりとかしてないし。」

少女は口をつんと尖らせ、息の音を殺していた。

「わかってるんでしょうね。本気なんでしょうね。」

腹筋に力をいれているのか。相手に気づかれないようにしているのか。強がりなのか。

「なにそれ。はっきりしなさいよ。まったく、あんたはほんつとむかしっからいつもうじうじしてんだからあ。腹決めたんでしょうが。」

息が続かないのか、

言い終わるとどうじに、肺に無理矢理空気が入ってくる。

「すきなんでしょう、本気で。いいなさいよ。ちゃんと大きな声でもう一度いってみなさいよ。その言葉をはっきり、私に聞かせてよ！」

額の血管は浮き出て、全身が熱を帯びていく。

腹筋から背筋まで力がこもり痛みに悲鳴があたりそうな顔をしている。

電話の向こうから何か大きな声がしたようだった。

少女はめをつぶった。

「そっか。」と聞こえた気がした。

それだけでは足らずに、眉間に全力でしわをよせ、歯を食いしばったまま、音がしないようにゆっくり大きく呼吸していた。

心臓はもう、溢れてもまだなお熱湯を注ぎ込まれるグラスのようになっ

もう一度なにか叫んだようだ。

右手に握っていた携帯を、投げ出さんばかりのすさまじい勢いで口元からはなした。

とたんに、くちから震える声が吐き出された。

目からは大粒の涙が赤い頬を伝って首までとどいた。

それなのに、

それなのに顔はなにか安堵のようなものを含んでいるのが、この位置からものはつきりうかがえた。

落ち着きのような表情。どこか安心したような瞳をぬらして、鼻水も拭かずに呼吸を整えているのだ。

私には少女の気持ちがよくわからなかった。

そのまま、秒針が一周くらいはしただろうか。

落ち着いた少女は肩のちからを抜いて左手に携帯を持ち替え、右手

の汗をパジャマの柔らかい優しい生地でふき取りながら、
やっとわらったのだ。

「詩をつくったの。きいて。」

どこからか、紙をとりだしていた。

なのに、それにはとくに目を当てず、指で握ったままだ。

悪戯っ子な顔をしている。

相手には顔なんて見えないのに。

電話の向こうからは、なにもきこえない。

相変わらず、窓の外はうるさい。

世の中は好き勝手やってる。

そんなことも気にしないのか、少女は歌った。

幸せにしないよ

絶対に幸せにしないよ

夏は小さい頃から毎年行ってるお祭りに連れて行って、
花火をみせなさいよ

かき氷を食べながら、星をかぞえ

るのよ

秋はサッカーの試合が忙しいからって、ほったらかしにしないでよ

自分の夢ばかり追いかけない

でよ

冬は寒いんだからひとりぼっちにしと

かないでよ

のよ

クリスマスは絶対あけておく

のよ

春はうかれて浮気なんかしない

見てるんだからね

大切にしないよ

私はしってるから

あなたは一度した決心を決して曲げない人だと

私もそうだから

幸せにしないよ

少女はもう泣いていない。

いいことでもあったかというように、笑っている。

机の上の小さい頃の写真を遠い目で見ている。

両隣に写るのは誰と誰だろうか。

電話の相手は誰だろうか。

窓の外では、世の中がいつまでも好き勝手やっている。

「じゃあね。」

そういつて少女は携帯を折りたたんでこちらのベットのの上に投げた。

窓を閉める。

しんと静まりかえった部屋。

少女はベットに身体をまかせ、小さな私の身体を大切に抱きしめ、

耳元でささやくのだ。

「ちょっと前まで私の後ろについてまわって弟みたいだったのに。」

「もう絶対幸せにしてくれないと許さないんだから。」

「だって、私の一番、一番大好きで大切なひとなんだもの。」

「ふたりは・・・。」

(後書き)

ありますよねこういうことは現実に・・・

世の中はほんとうに、小さな自分ら一人一人がなにを考えてるなんて気にもせず、

ただ好き勝手にまわっているんだと

思わされたりすることがあるかもしれません。

そのたび悔しさでいっぱいになります

ああ世の中はなんて残酷なのかと

こんなことを言ってしまうば

大げさだとわらわれるかもしれませんが。

こころない世の中の・・・達に

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1668i/>

伝えない電話

2010年10月16日09時00分発行